

---

# 魔法先生ネギま！ ～片翼の天使の力を得た男～

夜半

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法先生ネギま！ ～片翼の天使の力を得た男～

### 【Nコード】

N8526T

### 【作者名】

夜半

### 【あらすじ】

俺はある『力』を持っている。強大な力。それを手にしたとき人は何を思ふのか…。何を成すのか…。正義？悪？そんなくだらないことの為には、俺はこの力は使わない。俺は俺のために力を使う。邪魔をするなら容赦はしない。

## **P r o l o g u e (前書き)**

なかなか執筆が進まないので暇つぶしで書いていたものを投稿します。

よろしくお願いします。

## Prologue

あの日、俺は全てを失った。燃え盛る家。逃げ惑う子供達。

地獄絵図とも言えるこの光景を生み出したのは『魔法使い』と呼ばれる者達だった。

古来より日本には呪術士と呼ばれる者たちがいた。しかし年月が経つにつれ、その勢力は衰え、逆に魔法使い達が台頭を始めた。

そして、いつしか日本はその国土を二分する形で、西に呪術士、東に魔法使いという勢力図が出来上がったのだ。

そして、俺たちはその二大勢力の争いに巻き込まれたのだ。

魔法使いが放った魔法が流れ弾となって孤児院を直撃したのだ。

結論から言うと、孤児院は全壊。孤児院にいた職員、子供は俺を除いて全員死亡。俺は家族とも言える皆を失った。

何故、俺は無事だったのか。それは俺が『化け物』だからだ。

昔から俺は変わっていた。外見もそうだが、中身もだ。日本人とは思えない銀色の長髪で、妖しい光を帯びた瞳は氷のように冷たく、人を寄せ付けない雰囲気醸し出す。身体能力に至っては明らかに常人のそれを遥かに越える。

そして、この日俺は覚醒した。

目の前で一人、また一人とみんなが死んでいき、最後の一人が俺の腕の中で息を引き取ったの瞬間、強烈な頭痛とともに、俺の正体に

ついでに情報が流れ込んできた。

「ハハハツ……。ハハハハハははははふははははハハハハはは  
はふははははハハハハハははははふはははハハハハはは  
はふははははハハハハハははははふはははハハハハハハ  
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ  
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ  
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ  
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

俺は人間ですらなかった。いや、正確に言うなら俺という人間にある存在の力がそのまま憑依していたのだ。

それはこの世界とは全く次元の違う別世界の存在。

『ソルジャー』の『セフィロス』という存在だ。

それと同時に俺には片翼の翼が生えた。そして左手には2メートルを超える長刀『正宗』があった。

「おいおい…！！どうすんだよこれ!？」

「し、知らねえよ！お前がやれって言うからやったんだろうが!？」

6

貴様らがやったのか…！！

「黙れ…！！！」

ありつたけの怒気と殺気を飛ばす。そして次の瞬間には奴らの前に一瞬で移動する。

「が、ガキが何の用だ…！？」

黙れ。喋るな…！！！！

「そそそ、その刀で何をするつもりだ…。俺たちにはそんな刀は通  
用しないぞっ…！！？」

耳障りだ…！！！！

「正義の為には必要だったんだ…！正義の魔法使いの俺たちがあ  
しないと君たちにも危害が及ぶかもしれないなかったんだぞ…！！」

黙れ黙れ黙れ黙れ…！！危害が及ぶ？ふざけるなよ…！！

「貴様らが殺したんだろうが…！！！！！！」



この日、俺は『家族』を失い『力』を手に入れた。そして、初めて人を殺した。

## E p i s o d e 1

晴々とした青空の下、いつも通り登校する。

あれから三年が経過し、俺は13になり、麻帆良学園男子中等部に通っている。

あの事件は表向きには原因不明の爆発事故ということになっている。そして孤児院のみんなはたまたま外出していたことになった。

そう。魔法使いとやらはあの件を隠蔽したのだ。自分達の都合のいいようにな。まあ、俺もやることやったから、人のことは言えないが…。

しかし、あの件はまさしく俺の異常性を露顕させた。

俺はあの事件の原因の魔法使い二人を殺した。正宗で斬殺し、死体は能力で消滅させた。しかし、孤児院の原因が二人の魔法使いだとわかるように証拠は残したがな…。

なににせよ、俺は人を殺した。これは変えようのない事実である。だが、俺はそのことに何も感じない。罪悪感もなにもだ。

これがセフィロスとやらの能力のせいか、俺があの件で壊れてしまったのかわからないが、俺の精神は異常なことに変わりはない。

「…しかし、あの夢を見るのは久しぶりだ。これは何かの前触れか…？」

あの日以降、俺はマンションを借りて生活している。お金は株で荒稼ぎした。これはここ麻帆良では特に異常とは思われない。良くも悪くも麻帆良大結界のおかげだ。

ここ麻帆良は関東魔法協会という、魔法使い達の本部となっている。いろいろと調べているうちに、かなりね情報を入手できた。挙げればきりがないが、確実に言えることは、ここの魔法使いという奴は、どうしようもない馬鹿ばかりということだ。

自分達の『正義』とやらが絶対に融通がきかない。下手な犯罪者たちより力を持っている分たちが悪い。

……つと、物思いに耽りすぎたな。

「キャアアアアアアアアアアアッ!!」

朝の登校風景にそぐわない甲高い悲鳴が響き渡る。

俺の眼前の交差点で、麻帆良学園女子中等部の制服を着た女子生徒がトラックに轢かれかけている。

「……!!」

考えるより早く俺の体は動いていた。一瞬で女の子を抱え、トラックをかわして交差点を抜ける。

トラックはけたたましいブレーキ音を鳴らしながら交差点の中央あたりで停止した。当然、あたりは騒然となる。

「大丈夫か？」

「あ、ああ」

混乱しているようだが、ケガはないな。この力もこんなときは役に立つもんだな。

「いやあ、すまんかった。大丈夫かい？ちょっとぼうつとしてたんだ。大事にならなくて良かったな」

「なっ…!？」

まさしくこれだ。これが学園結界の弊害だ。

「何をヘラヘラしてんだオッサン？なに悪びれずに謝ってんだ？」

これだから腹が立つんだよ。魔法使い達にとっては都合のいい結果かもしれないが、ただの一般人には害しかない。自分達の行動の責任が取れなくなる。

「本気でそう思っているのか？だったらあんたは人として最低の人間だな」

軽く怒気に殺気をのせて言い放ち、彼女とこの場を後にする。

「変なところを見せて悪かった。思わず腹が立ってな…」

「あ、ああ別に気にしないから」

「こんだから麻帆良は嫌なんだよ。あの状況を普通と思ってやがる……」

思わず愚痴ってしまう。

「……………」

あ……、隣に人がいること忘れ……

「お、お前はさっきのが異常だと思っのか!？」

おお……、なんか必死だな。

「そうだな。あれは明らかにおかしいんだ。だいたいあの世界樹が一番おかしいんだよ……」

…なるほど。この子は学園結界の影響がないのか。それにしても彼女は魔法関係者とは思えない。

となると、彼女には確固としたアイデンティティがあるのだろう。自己の意志が強固な者には、この意志を捻曲げる結界はさほど効果がないしな。

「…苦労したんだな」

思わず呟いてしまった。彼女がこれまでどんな心労を積み重ねてきたかは想像にたやすい。

「俺でよければいくらでも話を聞いてやる」

おそらく気休め程度にしかないがやらないよりはましだ。所詮自己満足に過ぎない偽善だがな。

「そついえば名前を聞いてなかったな」



ついでに、俺も教えてないな…。

「は、長谷川千雨だ」

「俺は神代凜。女みたいな名前だがちゃんと男だからな」

これが俺と千雨の出会いだった。

## Episode 2

「さて、話を聞かせてもらおうかの」

満天の星空を一望できる麻帆良でも有数の天体観測スポットの一つ、世界樹広場で俺は、学園長近衛近右衛門他十数名と対峙している。

どうやら今朝の一件は魔法使いに見られていたようだ。一瞬でトラックに轢かれかけた女子生徒を助け出した身体能力。得体の知れない男子中学生と認識されたんだろうな。

味方か？はたまた敵か？目的は？どこの組織のものか？

とにかく謎だらけ。だからこそこつやって深夜に呼び出して、おそらく腕利きの魔法使い達を集め、威圧するようにしているのだろう。

正直、馬鹿馬鹿しい。

家に帰って郵便受けを確認すると、差出人不明の郵便にただ一言、  
『深夜零時に世界樹広場に来てくれないか？』。

それに応じて律儀にきた俺も俺だが、それ以上にコイツラは理解できない。なぜ、上から目線なんだ？コイツラは俺から話を聞きたいんだろう？

それなら相応の誠意を見せろって言いたい。しかも到着するなり人を囲っておいて、『話を聞かせてもらおうかの？』。主語がないんだよ、主語が。

さて、どうしたものか…。とりあえずはあれだな。

「……あ、もしもし？なんか変な集団に囲まれて、困ってるんです。

助けてください。……ええ、場所は世界樹広場です。できれば早くお願いします」

「……!？」

まずは警察に連絡。まあブラフだけどな。

実際、変な『自称正義の魔法使い』たちに囲まれてるし。

つか、何驚いてんだ？。普通だろ。正体も明かさず呼び出して、威圧してるんだから。

「なにか問題でも？ 実際あんたらは俺に危害を加えようとしてるだろ」

「それはおぬしの話次第じゃ。神代凜」

「俺の話次第？ ついにボケたか爺。あんたのその長い頭には脳みそ詰まってるないんだな。何で呼び出されてまで俺が話をしなきゃならないんだ？ 話を聞きたいならそっちから出向いて来いよ。それが礼儀ってもんだろ」

「人前では話せない内容じゃからな」

「それはあんたの都合だ。俺には関係ない。第一、こんな時間に生徒を呼び付けるなんて馬鹿だろ」

日中に聞けばいいだろうが。わざわざ深夜にする必要性は皆無。人に聞かれない話なら、伝家の宝刀、認識阻害魔法を使えばいい。そんなことも気づかないのか？

「俺と話をしたいなら相応の誠意を見せろ」

話すことなんか一つもない。第一、この爺があ的事件を隠蔽した張本人だしな。それに、さつきから人の頭を覗こうとしてるしな。…無駄なことに気づかないあたり、この爺も魔法にかなりの信頼をおいているんだろうな。それでは、ただの魔法というおもちゃを与えられたガキだ。

「じゃあな。俺は帰らせてもらう。」

実にくだらない。人とは違う力を手に入れて図にのっているのは

つきりわかる。まあ、爺とあそこの高畑教諭はその辺のことを多少は理解してそうだが、この対応を見る限り、大差はないな。

「…って言ったそばからこれかよ」

帰ろうとしたら俺を囲んでいる奴らがいつせいにそれぞれの得物を構えた。

「こちらの質問に答えるまではそれは許せんのお」

こうやって力をちらつかせれば屈するとも思っているのか？俺があんたより弱いって確証でもあるのか？

これだから嫌いなんだよ…！！

「君の正体がわからない以上、こっちも相応の対処をしなくちゃいけない。だから質問に答えてくれないかな？」

今まで黙っていたくせにこんな状況になってようやく喋った高畑教諭。

なんだ？ 飴と鞭のつもりか？

「自分達が優位に立っているとも思っているのか？」

『正義』だのなんだのと言っておきながら結局最後には自分の都合を優先する。決して自分の信念、信条のために力を奮わない。『正義』という言葉に酔っているだけ。そして何より……

「人に武器を向けるということは『覚悟』はあるんだろうな？」

自分が『殺される覚悟』、自分が『殺す覚悟』。それがなければ武器を持つな。

「『正義』と自称しておきながら貴様ら魔法使いは何をした？」

『正義』を掲げ、人の意志を都合よく捻曲げる。



「『正義』なら何をしても許されるのか？ 自分達の価値観を押し付け、相手の意志はおろか、記憶すら改竄しても…！」

記憶はその人の人生そのもの。その改竄は人生を否定する。他者の人生をいとも簡単に搾取する大馬鹿者がこいつらだ。

「貴様らの結界によって苦しんでいる女の子がいるのを知っているのか…！！」

貴様らが長谷川千雨のような少女を生み出した。彼女の心の傷は貴様らが造った。

ああ…、ダメだ。抑えられない……

「貴様らのくだらない『正義』によって殺された何の罪もない子供達がいることを知っているのかっつー！！！！」

俺の雰囲気が変わったことに驚いてるのか？

…だが、貴様らにそんな余裕はあるのか？

「覚悟はいいな…。なに殺しはしない。貴様らには……………」

『絶望』を教えてやろう。

## Episode 2（後書き）

少し展開を早くしました。最初の『正義』の魔法使い達との衝突です。

ちなみに凜は感情が高ぶると口調が変わります。

凜はセフィロスの人生そのものを『体感』しているので、『死』や『力』、『覚悟』について自分なりの答えを持っています。

さあ、次回は凜vs『正義』の魔法使い。凜の圧倒的な暴力が……  
…？お楽しみに！

## Episode 3

なぜ、こうなってしまったんだろう。さっきまでは神代君の話を聞くだけだったのに、今では神代君と闘っている。

確かに、いきなり呼び付けておいて一方的に話を持ち掛けた学園長のやり方に憤慨するのはわかる。

だが、それも神代君の正体がわからない以上、『仕方のない』ことだ。学園に危害を与える存在だったなら、確実に排除しなくてはならない。

そうしなければこの生徒達を守れないからだ。

神代君が帰ろうとしたとき、神代君を囲んでいる魔法先生、生徒たちそれぞれ自分の魔法発動体を構えた瞬間……

神代君の雰囲気が変わった。

肌を刺すような怒気。叩きつけられる言葉。

こうみえても僕はかなりの死線をかい潜ってきた。

『英雄』と呼ばれる『彼ら』の戦いを一番近くで見て、感じて、目標にしてきた。

その僕でも『わからない』。

しかし、これだけは言える。

『所詮中学生。侵入者だとしても簡単に対処できる』

これは大きな勘違いだ。

おそらく2メートル近くある長刀を手にした神代君を見て、僕は、  
高畑・T・タカミチは理解した。

|  
|  
|  
|  
|  
|



「…どうした、俺が武器を持っていたら変か？あんだ達はこれを用意していたんじゃないのか？」

正宗を左手に持った俺を見て狼狽する魔法使い。

「い、今、奴はどこからあの馬鹿でかい刀を出したんだ！？」

自分の眼で見えるものしか信じない、理解しようとしなない。自分達の『常識』がすべてだと信じている。

だからこそ、ありもしない『正義』に縋り付く。

そうすることでしか『力』を使えない。

「あんだ達が先に得物を構えた。そして俺はそれに応じた。ここから先は簡単。最後に立っていた奴が勝者だ」

そう。勝者であって、決して『正義』ではない。正義は勝つ？むしろ、勝てば官軍。こちらのほうが正しい。

「我ら正義の魔法使いが負けるわけがない！」

正義が勝つのではない。歴史は勝者によって作られる。だからこそ勝者＝正義という図式が出来上がった。

「魔法の射手・炎の15矢！」

「魔法の射手・雷の10矢！」

……牽制のつもりか？

「まる見えなんだよ！」

魔法の矢を正宗ですべて切り裂き、紛れて接近してきた奴を蹴り上げる。

「天照」

蹴り上げた奴に切り上げを追加。殺しはしない。だが骨の一、二本はもらう。

「ガッ……!!」

「一応峰打ちだ」

右腕の骨をへし折る。受け身なんか取れるはずがない。案の定、頭から落ちた。

「虚空……」

最初に魔法を放ってきた二人が標的だ。

「どこを見ている？」

どうやら俺の動きについてこれないようだな。慌てて振り返っても遅い。

「……………！！……………」

両肘、両膝、ついでに喉も潰してやった。声を上げることなく崩れ落ちる二人の魔法使い。

「くっ…、外だ！奴の間合いに入るな。遠距離から魔法で狙い撃ちにしろ！！」

…その判断、『普通の剣士』を相手にするときには正しい。だが、俺は『普通の剣士』ではない。

「縮地」

斬撃は飛ばせるんだよ。……まあ、これは剣圧だが…。

「ば、馬鹿な！？…あああ！！！！！」

これで五月蠅いのはいなくなった。こいつらは適当にあしらっておけばいい。

大事なのはこいつら、魔法使いが認める『強者』を圧倒的な暴力で屈服させることだ。

こいつらの精神的支柱をへし折る。そして、『こいつには敵わない』  
と思わせる。

だからこそ…

「あんたも酷いもんだな…。高畑教諭。何を呆然としてるんだ？あんたがそんなだから、ほら、見ろよこの有様」

酷い奴は四肢が動かず、声も上げられない。軽い奴でも利き手をざっくり斬られている。この傷は致命傷ではないが、あまり放っておくと失血死するかもな。初めての『痛み』で治癒魔法を使う気力すらないようだ。

「あんたが行動していればこんなことにならなかったかもしれないな」

この高畑教諭を叩く必要がある。

この麻帆良学園においては、学園長が一番らしいが、人前でその力を見た者はいない。

一方、高畑教諭はデスメガネと呼ばれ、知名度は高い。それに『紅き翼』に同行していたこともあり、魔法使いにとっては、憧れでも

ある。

そして、何よりその強さは学園長さえ除けば学園最強と呼び声高い。

そんな高畑教諭が得体の知らない中学生に負けたら、いくら、頭の固い『正義の魔法使い』でも、嫌でも理解するだろう。

さあ、ここからが本番だ。

高畑・T・タカミチ。あんたは俺が『闘う』に足る『覚悟』を持っているのか？





## Episode 3 (後書き)

ちなみに、今回凜が使った技は以下のとおり。

天照

斜め下から上方に向かって斬りつける。

縮地

複数の剣圧を飛ばして攻撃する中距離攻撃。追加で瞬間移動しての切り付けを行う。

虚空

高速ですり抜けて後に大量の斬撃を加える。

こんなところですか。

## Episode 4

やっとやる気になったか。

それに一瞬爺に目配せをしたな…。大方自分との戦闘を見て、俺の力を見極めるつもりなんだろうな。だが、そう上手くいくと思うなよ？

「ポケットに手をつ突っ込んだままやるのかい？」

そういえば、高畑教諭は『無音拳』の使い手だったか。

…っと!？

何かが来る気配を感じて首を少し傾ける。すると何かが俺の顔の横を通り過ぎた。

「…まさか初見で避けられるとは思わなかったな」

なるほど。今が無音拳。ポケットを鞘代わりにして、高速の拳を打ち出す。そして今のは拳圧を飛ばしたのか。

噂に違わぬ実力ではあるようだ。だが、明らかに手加減してやがる…。思い上がるなよ。

「手加減できるような状況か？…八刀一閃」

瞬動でもなんでもないただの脚力で肉薄し、一瞬で八撃与える。

「っ！？」

しかし、これは紙一重でかわされ、距離を取られる。

「いい動きだ。だが甘い」

飛び退いた先に向かって無数の斬撃を飛ばす。飛来する斬撃は地面を削り、高速で高畑教諭へと向かう。

「くっ!？」

不安定な体制だが、さっきよりも遙かに力強い拳圧によって相殺していく高畑。不安定な体制ながらもしっかりと反撃をこなすのは見事だが…

「獄門」

そっちはかり注意してていいのか？

俺はおとなしく相殺するのを待ってやるほど優しくはない。

一瞬で頭上へと移動し、急降下。高畑の右肩に正宗を突き立てるが、わずかに体を捻られたせいで、傷は浅い。

「よく避けたな」

「（ありえない。あの速度で動くなら、何かしらの動作の予兆なり、魔力、もしくは気の強化が見えるはず…）」

「（まさか、高畑君がとらえられないとは…。これはちと旗色が悪いのお）」

「考え事か？あんたにそんな余裕があるのか？」

それぞれ思うところがあるようだが、知ったことが。結局相手の力も推し量れず、自分の身を滅ぼすだけだ。

「続けていくぞ？今度はさっきのようにはいかないぞ？」

俺の真骨頂はこの体の圧倒的な身体能力を生かした高機動戦闘。その真価を少しでも教えてやる。

最初と同じように、一瞬で懷に潜り込む。そして横薙ぎ。当然この程度はかわされる。

俺に懷に潜り込まれた瞬間、高畑教諭は瞬動で俺の背後を取った。

「それは悪手だ」

俺に動きに遅れて、高畑教諭の背後から移動すると同時に放った剣撃が迫る。そのことに気づいた高畑教諭は更に瞬動を行う。

「見えてるんだよ。のろま」

その程度のスピードで回避できると思うな。瞬動した方向にさらに剣撃を飛ばす。

「!!!!!!」

瞬動で高速移動できるとはいえ思考が加速するわけではない。そのことを知らないわけではあるまい。

……だいぶ飽きてきたな。終わらすか。

「一閃」

身構え、突進からの斬りつけ。速度は俺の技の中でも最速。さっきの動きが見えなかった奴に見えるわけがない。高畑の右腰から左肩にかけて斬り上げ、そのまま背後に駆け抜ける。そして、遅れて襲いかかる13もの斬撃。

一つ残らずその身に受けた高畑教諭は地に臥せた。峰打ちではあるが、おそらく全身いたるところが骨折を起こしているだろうな。

「あんたの部下はこの程度か？」

結局、この爺は高見の見物。今の戦闘で何をつかんだのかは知らんが、あの程度なら別に問題ない。こちらの手札はまだまだある。

「じゃあ、今度こそ俺は帰らせてもらう。一応言っておくが、俺はあんたらが俺に突っかかってこない以上、この学園に危害を加えるつもりはない。あんたらのくだらない争いに巻き込まれるのはごめんだからな」

俺の正体は話すつもりはないが、この程度は言っておかないと面倒になりそうだしな。どっちにしてもこの爺が部下達を押さえられなければ、俺を危険分子として何かしらの行動を起こしそうだが……  
まあ、そうなったらそうなたで『排除』すればいいだけ。

「せいぜい、部下達が暴走しないように上手く手綱を握るんだな」

……反応はなし。どうせろくでもないことを考えているんだろうな。

さて、帰るか。しかし、俺もまだまだだな。もう少し自分の感情をコントロールできないとな……。



|  
|  
|  
|  
|  
|

「ずいぶん面白い小僧がいるもんだな…。あの年でなかなか歪んでいる。そして何より、奴からはこの600年生きた私ですらない何かを感じる。あの小僧を上手く使えばこの忌まわしき呪いも……」

「ふむ…。どんなイレギュラーかと思タラ、随分と変わった人みた  
いだネ。学園の魔法使いとは違うみたいネ。これは、一度接触する  
必要がアルネ。私の計画の障害となる存在か否かを確かめるために  
もネ……」

俺は、この戦いを見ていた二人の人物に気づいてはいた。しかし、特に注意する必要はないと判断した。

……結論的に、この件がきっかけで、俺は忌まわしき『魔法』と本格的に関わりを持つことになったのは言うまでもない。

## E p i s o d e 5

### 『神代凜に関する推察』

神代凜。麻帆良学園男子中等部一年A組所属。なお部活動には所属しておらず、麻帆良学園近郊の高級マンションの一室で一人暮らしをしている。

学園での成績は非常に良好。入学以来トップをキープ。教員（一般教師）からの信頼も厚い。魔法関係の教員達からは、あの一件以降敵視にも似た視線を受けているものと思われる。

その日本人とは掛け離れた容姿と、幽玄な雰囲気から女子生徒からの人気はかなりのもの。しかし、本人は特に気にする様子は見られない。

パーソナルデータは、現在の生活ぶりからも天涯孤独の身と思われるが、過去のデータが『皆無』なため、判断しかねる。

なお、魔法使いに対して好意的な感情を抱いてないことは明白であるが、こちら側に引き込める公算は五分五分といったところだろうか。

しかし、それでも彼を引き込むことができれば私の計画も盤石なものとなるだろう。

やはり、特筆すべきは彼の戦闘力。

彼は、あの高畑・Ｔ・タカミチを圧倒した。手も足もでないとはまさにあの光景を指すのであろう。

確かに、高畑教諭も全力ではなかったかもしれない。しかし、彼がまったく知覚できない、剣速と移動速度。

魔力も気も使わずそれを可能とする脅威的な身体能力。

例え、人類がその身を限界まで鍛え上げても、あの領域には決して到達できない。

となると、考えられる可能性は神代凜は『人類』ではない、という可能性。

エヴァンジェリンのような最強種かもしれない。

もしくは……

そういえば、もうひとつ。彼の武器である長刀。その取り出し方が問題だ。

彼はあの刀を何もない場所から取り出した。暗器の可能性も考えられるがあの長さはありえない。

そうになると、考えられるのは転送魔法。もしくは、あの刀を質量をゼロにして分解。そして刀を使用する際に質量を構築する。

どちらの手段にせよ、それは『この時代』の魔法、科学ではありえない。

『私の時代』でかろうじて物質の転送魔法が実用化されているぐら

いだ。ましてや物質の質量をどうこうするのは机上の空論だ。

……興味が尽きないのはこのことをいうのだろう。何にせよ、彼から直接話を聞かないと始まらないね。

「超さん、まだやってたんですか？」

「む…、ハカセか…」

「頑張るのはいいですけど、やりすぎは駄目ですよ」

「それはハカセにも言えることネ」

ハカセも一睡もせず研究室に籠っているとときがあるからお互いさまね。

「うん？…また彼ですか？」

「そうヨ。彼の存在は私の計画を左右するかもしれないネ」

彼が味方になれば強力だが、敵に回れば厄介極まりないね。ただでさえ、計画実行の日には『英雄の息子』も麻帆良にいるのに。

「確か、神代凜さんでしたっけ…？茶々丸の話だと、エヴァジェリンさんも彼に興味を持ってるみたいですよ？」

それは初耳ね。…………エヴァンジェリンの目的はおそらく呪いの解除。エヴァンジェリンは彼に何を見たのか知らないが…

「…………ハカセ。明日、私は彼に会ってくるネ」



エヴァンジェリンが興味を持つなら、尚更彼の正体を知る必要がある。

そうだね。明日の放課後に行こうか。幸い、彼のマンションの場所  
は知っているしね。

私はこんなところで立ち止まるわけにはいかない。どんな手を使っ  
てでも、計画を成就させる。

そのためなら悪魔にだって魂を売り渡す。

## Episode 6

「……連絡事項は以上。それと、明日から遅刻者への罰則が強化されるから注意しろよ。まあ、このクラスには遅刻常習者はいないから大丈夫だろうが」

担任による連絡事項が終わり、これから部活動に所属している生徒たちはそれに参加し、そうでない生徒はそれぞれの時間を過ごすことになる。

ちなみに俺は後者だ。

あの一件からちょうど一週間が経った。懸念していた学園側からの接触、もとい干渉がないところから察するに、学園長がとりあえずは抑えているのだろう。

嵐の前の静けさかもしれないけどな……。

そういえば、あれから変わったことが一つ。

どういうわけか長谷川さんとメールのやり取りをするようになった。

それと、登校のときに一緒になることも多い。

もっぱら、長谷川さんの愚痴を聞く形ではあるが、それで、少しでも長谷川さんのためになるなら、悪くはない。

「じゃあな、神代」

「ああ、またな」

一人、また一人と教室からクラスメイトが出ていく。俺もいつまでも教室にいるわけにはいかない。手早く荷物をまとめて、教室出る。

さすがにマンモス学園。各部活動の熱気というか、活気がすごいが、特に感じることもないので、さっさと帰るに限る。下手に長居すると勧誘がつるさいからな。

「あつ！神代がいたぞ！」

「なにい！？」

「神代くー！！今日こそ返事を聞かせてもらっぞ！」

言ってるそばから見つかってしまった。

「三十六計逃げるにしかず！」

……こういうのを力の無駄遣いって言うんだろうな。

追いかけてくる人の群れを置き去りにして、俺は自宅を目指す。

――――

なんとか？まあ、普通に自宅にたどり着いた。別にさっきのは日常茶飯事だから特に疲れたとかはない。

むしろ、あの光景を毎日飽きもせず繰り返す連中の気がしれない。そしてそれを見ても『異常』と思わない周りの生徒。

こんなところでも学園結界の影響がでている。その中心が俺なんだから笑えるな。

「…さて、とりあえず今日の晩飯なんにすっかな。……って誰だ？」

晩飯の献立を考えといたところに、インターフォンが高らかに響き渡る。生憎、俺には自宅に来るような友人はいない。となると、新聞かなんかの勧誘か？

インターフォンに備え付けのカメラで外を見る。

「この制服は女子中等部の……」

カメラの映像には一人の女子生徒が写っていた。その制服には見覚えがある。長谷川さんと同じ制服だ。

「それに、この子は確か…」

麻帆良の最強頭脳。超包子のオーナー。俺が言えた義理ではないが、なんでも超人、超鈴音その人だ。

俺、なんかしたか？……………心当たりはないような、あるような。

……………！！

ああ、あの時見ていた二人のうちの一人か。何が目的か知らんが、話ぐらいは聞いてやるか。

「空いてるから、上がるといいよ。たいしたもてなしはできないが、お茶ぐらいは出そう」

「…ならお邪魔するヨ」

さて、超鈴音。君は俺に何を見せてくれる？





## Episode 7

とりあえず、紅茶と茶請けの菓子を超鈴音に出す。そして俺はダイニングテーブルの向かいに座る。

「ふむ…。これはおいしいネ」

「そいつはどうも」

そりゃそうだ。わざわざお取り寄せした茶葉だ。そこらの安物と一緒にしてもらっては困る。

しかし、優雅に紅茶を飲むな。まあ、上手そうに飲んでもくれるのが一番だしな。

「…さて、君はなぜ、俺のところに来たんだ？」

「神代さんに惚れてしまったからネ。告白しにきたネ」

「冗談はその辺にしとけ。あんただろ？あるとき、俺を『観て』たのは？」

確信はあるが、一応、確認しとかないとな。

超鈴音はカップを置き、一つ深呼吸をした。そして、俺を睨むように見つめる。

「…そこまでバレてるなら、単刀直入ネ。神代さんには私の計画に協力してほしいネ」

なるほど。だから俺を『観て』たのか。俺の実力を把握し、それが自分の計画に有益なら取り込む。

となると、こいつの計画とやらは、魔法使い達を敵に回すのだろう。だからこそ、ある程度の実力を持ち、かつ、魔法使い達とは距離を置く俺に目をつけた。

さて、どうしたものか。

とりあえず、自分の分の紅茶を少し口に含み、口内を潤す。

「まず、計画に協力もなにも、あんたの計画自体何をするのかわからない状態では返答のしようがないとは思わないか？それと、隣のマンションの屋上からこっちの様子を伺ってるのはあんたの仲間だろ？あまり褒められた趣味じゃないな」

気づいてないと思ったか？

「……さすがネ。……もういいよ龍宮さん。どうやら最初からバレてみたいネ」

無線か？もしくは念話の類か…。

「…いなくなったようだな。それで？あんたの計画とやらはなんだ？」

「……………」

無言。

話すべきか迷っているのか？本当に実現させたいならある程度のリスクは負うべきだ。それすら理解できないなら計画とやらは失敗するだろう。

「…私の計画は、現在秘匿されている『魔法』を全世界に『認識』させることネ」

話したか…。

「その心は？」

どうやってそれを為すのかは聞かない。聞いたところで答えるはずがない。とりあえず目的がわかっただけでもOKだ。

「…心とは？」

「あんたがその計画を何のために実行するのか。それが聞きたい」

「…魔法という力があれば、今、この瞬間も苦しんでいる人々を救うことができるかもしれない。そんな力を一部の人間が独占しているから、私がそれを世界に公表するネ」

「……それは嘘だな。あんたはそんな人間じゃない。あんたの行動理由は、もっと別のところにあるはずだね」

「……………」

「違うか？ 違わないだろ。確かに魔法という力が公表されればあんたが言った通りになるかも知れない」

それも事実。だが、現実はそんなに甘くない。

「だが、そうなればただでさえ増長している魔法使いたちがさらに増長する。極端な話、世界は魔法使いによって統治されるべきとか吐かしてね」

かなり高い確率で魔法使いによる選民思想ができるだろうな。もしくはその逆。

「そうならなかったとしても、魔女狩りの再来かもな」

人は自分達とは異なる存在を簡単には認めない。むしろ弾圧、排除する。

「それを理解できないわけではないだろう？」

「…私の計画が成就したあと全世界で起こりうる可能性に対処するだけの技術と財力は準備してるネ」

「立派な心掛けだが…、そこまでする目的が世界のためとかありえない。あんた自身にそうしたい、そうしなければならぬ理由があるからそうするんだ」

ただ純粹に世界を救う。こんなものはありえない。言葉遊びになるが、世界を救うというのは目的であって、行動理由ではない。

同様に、超鈴音の魔法を世界に公表するというのも最終的な目的であって、超鈴音の行動理由ではない。

「あんたの行動理由はなんだ？」

「…それを話せば協力してくれるのカナ？」

「さあな…。少なくとも、あんたへの信頼度は多少あがるかな」

「…ふむ。なら神代さんの行動理由とやらを話してくれるのが条件ネ」



「…そうくるなら、お引き取り願おう。俺に大した行動理由はないよ」

強いて言うなら我が儘か…。覚悟はある。だが、俺がこの力を奮うのは、高尚な目的のためではない。ただ、俺の思いを貫くためだ。

「どうやらこれ以上の進展は望めないようネ」

まあ、そうだろう。俺は魔法が公表されようがされまいが、どうでもいいしな。

「…気が変わったら、ここに電話するといいネ。盗聴等の可能性はゼロだからネ。まあ、私としては神代さんには是非、私の計画に参加してほしいネ」

椅子から立ち上がった、超鈴音はポケットから名刺のようなものを取り出し、テーブルに置いた。

「紅茶、おいしかったネ。よければウチの屋台にもくるネ。歓迎するヨ」

「ああ。気が向いたらな」

とりあえず、わかったことはひとつかな。

超鈴音。こいつは多分、『この世界』の人間ではない。いや、むしろ『この時代』の人間ではない……といったところか。

こんなことを、超鈴音を送り出しながら俺は考えていた。

## Episode 7 (後書き)

ちよつと強引だったかな？

次は会談を終えた二人の様子を描きます。

## Episode 8

「どうだった？」

「…全くダメだネ。相手にすらされなかったネ」

あの見透かされそうな瞳。自然で無駄のない所作。こちらの思考を読まれているような的確な言葉。

「正直、初めて見るネ。あんな人は」

私が言えた義理ではないが、あれほどの話術をどこで身につけたのか。私と同じ年とは思えないね。

「それで？真名はどう感じたネ？」

「そうだね…。正直相手にはしたくないね。さつきも気配は消していた。それに彼はこちらを気にするそぶりも見えなかった。なのに彼は私に気づいた」

確かにそうネ。一応、真名には魔力や気を擬似的にゼロにして気配を消す、魔法符による結界を張ってその中に待機してもらっていた。

「それに彼にはどんなに銃弾を撃ち込んでも無駄になりそうだしね」

「確かにそうネ。…しかし、彼の協力は欲しいネ。なんとかして協力を取り付けることができないかな？」

せめて、彼の情報がもう少しあればいいのだが…。

私の『知識』には彼のような存在は、この麻帆良にはいなかった。

私というイレギュラーがこの『時代』にきたから彼というイレギュラーが生まれたのか。

世界の意味、世界の修正力。そういったものが働いているのか。

結論はわからない。

しかし、彼の動向には注意しなければならない。

個人の力が世界を変える。

ありえないことだが、彼はそれを成しうるかもしれない。

その力が味方につけば心強い。

だが、その力が私に牙を向けたら……。

……まずは情報だ。彼には味方にならずとも、こちらに敵対しない確約がほしいネ。

そのためにも情報があるネ。

――

「超鈴音か…」

カップと皿をカチャカチャ洗いながら一人呟く。ある意味想像通りで、ある意味想像以上の人物だった。

少なくとも、あれだけ交渉に長けた中学生はいないだろう。それこそ、あれは国のトップとかもやれそうだ。実際、会社のオーナーや  
つてるし…。

俺の場合、『セフィロス』の知識があるからああやって上手く、こちらの流れで会話を持って行けただけ。

それがなければ彼女にペースを握られてただろう。

ああ見えて、なかなか過酷な『世界』を生きていたのだろう。

「魔法を世界に公表する。それに伴って、世界で起こりうる可能性に対処する技術と財力を用意している…」

はつきり言おう。これは明らかに『異常』だ。魔法を世界に公表したときに起こる問題は『予想』はできる。さっき俺が言った通りだ。

しかし、それに『対処』はできない。あくまで予想は予想に過ぎず、実際は、現実が起こったことに逐一対処していくしかない。

考えてみてほしい。ある事故が起きた。それが起こる可能性がある



ことには気づいていた。だが、その事故の対処にはもたつく。対処法も考えていたが、実際に起こって見ると、自分達の想像とはかなり違っていた。だから対処ができない。

これが典型的なパターン。これから先、起こりうる可能性に対処する技術というのはない。あるとすれば何が起こるかを事前に知っておく必要があるが、人間には未来はわからない。だからこの先起こる事態に対処できる準備なんかできないのである。

しかし、超鈴音はそれができるといった。技術と財力を用意したと。

これすなわち、超鈴音がこれから先に起こる事柄を知っていると暗に示している。

ここまで理論を展開できれば自ずと『超鈴音は未来人』という仮説にたどり着く。

「おそらく、超鈴音は俺がこの仮説にたどり着くであろうと見越してるな……。喰えない奴だ」

なんか、厄介なのに目をつけられたな……。今後はいろいろと気をつけて生活しないとな。

## Episode 9

『普通』で『異常』な日常。

自分でもかなりおかしいことを言ってるのは理解している。だが、事実である以上仕方ない。

「これならイケるでしょ？」

「どうだろうな？ 高畑先生は手強いしなあ……」

教室の入口にトラップを仕掛ける、どう考えても小学生のような外見の双子姉妹。

「マスター……。そろそろ高畑先生が来ますよ」

「ああ……。放っておけ。タカミチなら問題ない」

明らかにオーバーテクノロジーなロボット。『麻帆良の外』ではまだロボット開発は、ようやく二足歩行ができるようになったばかりだったはずだ。

それに中学生とは思えないような体をした連中もいる。グラビアアイドルも真っ青ってやつだ。

ほかにあげればキリがないから割愛するが『異常』だらけだ。

しかし、これが私のいる麻帆良の『日常』。どう考えてもおかしい。

だが誰もそうは思わない。おかしいと思っているのは私だけ。

昔は声高にこのことを周囲に訴えた。

『え？おかしくないでしょ。普通じゃん普通』

しかし、相手にされなかった。むしろ私がおかしいとさえ言われた。

それが原因で私は人に対して一定の距離をとるようになった。

ネットを始めたのもある意味、これがきっかけ。

このまま、『普通』を『異常』と感じつつも、それが麻帆良だから『普通』なんだと自分に言い聞かせる毎日を過ごすものだと思っていた。

しかし、人生何が起きるかわからないものだ。

あの日、私はいつも通り登校していた。

ある交差点を横断していたらトラックが猛スピードで私に向かって

きた。

ブレーキがけたたましく鳴り響く。それに対抗するように私もおそろく初めて叫び声というものをあげた。

目を開けるとそこには太陽を背に、腰まである銀髪を煌めかせて、私を抱えている同じ年ぐらいの男の子がいた。

「大丈夫か？」

「あ、ああ……」

予想外の『異常』な光景にろくな反応が返せない。

そんな私を尻目に銀髪の男の子はトラックの運転手を問い詰めている。

久しぶりに見る『普通』の光景。

トラックに轢かれかけたことなんかどっかに飛んでしまった。

その後、他愛もない話をしながら学園まで登校した。彼も私と同じだ。麻帆良の異常を異常と認識できる人間だ。

自分と同じ人間に会えたからか、今までの鬱憤を晴らすかのように愚痴を今日初めてあつた彼に話してしまった。

でも、彼は嫌な顔ひとつせず黙って話を聞いてくれた。そして最後に、彼の名前を聞いた。

「神代凜だ。女みたいな名前だが、れっきとした男だよろしく」

これが彼と私。神代凜と長谷川千雨の出会いだった。

私の『異常』で『普通』な日常が変わった瞬間でもあった。



## Episode 10 (前書き)

遅くなりました

## Episode 10

### 銀行強盗。

この言葉を聞いて世の中の人々はこういったことを考えるだろうか。

刑法236条「暴行又は脅迫を用いて他人の財物を強取した者は、強盗の罪とし、五年以上の有期懲役に処する」

現行法上の強盗の規定はこうなっている。しかし、今現在俺の目の前で繰り広げられているのは『魔法』による強盗だ。

これは暴行でもないし、当然脅迫でもない。とすると、強盗にはならないのだろうか？

…別に刑法について論じるわけではないが、俺の目の前で繰り広げられる光景をみて、ふとこう思ってしまった。一応言っておくが現実逃避をしているわけではない。

まあ、その、なんだ。俺は今銀行強盗に巻き込まれている。

一日の授業が終わり、生活費を下ろしに銀行に行ったんだが、突然銀行内に霧が充満して俺を除いた行員・客は皆夢の中へと旅立った。

当然俺はレジスト、無効化した。まあ、俺が座っている位置が銀行の隅っこだったので犯人グループは気づいてないようだ。

結局犯人達は俺に気づかないまま、おそらく金庫？を物色しに奥へと進んでいった。

「とりあえず、警察に連絡しておくか…」

魔法を使う犯人に『表』の世界の警察が何かできるとは思わないが、呼んでおいて損はない。

え？俺が解決しないのかって？

…あり得ないね。これは麻帆良のゴタゴタ。犯人が魔法を使っているところから勘案するに、関東魔法協会に所属する魔法使いの可能性もある。

自分の尻は自分で拭けと言いたい。

だからこそ俺は何もしない。せいぜい警察に連絡するくらいだ。あとは好きにしてくれればいい。

「とりあえずATMで金を下ろして帰るか」

銀行内に設置してあるATMの前に立ち、キャッシュカードと通帳を入れ、暗証番号を入力しようとしたその瞬間、どこかで見たことあるガングロスーツと制服姿の女子生徒が銀行に入ってきた。

「…俺は今日厄日か？」

そう呟かずにはいらなかったが、別に手を止めることなく、暗証

番号を入力して向こう一月の生活費を下ろす。そしてお金を財布に入れて銀行を後にするが…。

「ちょっとあなた」

チツ…。やっぱりか。

「あなた、ここで銀行強盗が来ているのを知っているのですか？」

「…もちろん。俺の目の前で起こったからな。ちなみに犯人は奥に行っただぞ」

「そこまで見ているのにあなたは犯人を見逃したのですか!？」

あー…うぜえ。こいつは典型的な正義馬鹿だな。

「俺は金を下ろしに来た。銀行強盗を捕まえにここに来たんじゃない。勘違いするなよ？俺はこいつらがどうなっても知ったことではない。お前らがやりたいようにやればいいだろうが。崇高な自己犠牲の精神でな」

人はそれを自己満足と呼ぶ。

「なんでもかんでも自分の価値観を押しつけるな、偽善者。お前の価値観なんざちっぽけなもの。それが常識だと思うな」

くだらん。これだからこいつらは嫌いなんだよ。言いたいことは言ったし帰るか…。

しかし、今日はついてないな…。せめて明日は今日よりましな一日になることを願うとするか。

## Episode 10 (後書き)

特に取り留めもない日常風景かと思いきや……

次回の更新をお待ち下さい。

## Episode 1

「どつぞ」

俺の目の前に紅茶が置かれる。

そして目の前には金髪幼女が踏ん反り返るように座って俺を値踏みするように見ている。

そして、紅茶を出してくれた少女？が金髪幼女の後ろに控える。

なんだこの状況。俺の日常は壊される運命にあるのか？

一度お被いしてみようかな…。無駄だが…



「それで？いきなり人を呼び付けるなんてあんた何様だ？」

「ほう…。その口ぶり、私が誰か分かつての言葉か？」

とても外見に不相応な尊大な口調で喋るこの幼女。

その正体は魔法使いの世界では知らぬ者はいないほど有名な『悪』の魔法使い。

『エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル』

600年は優に生きている真祖の吸血鬼。

闇の福音などの二つ名を持つ元600万\$の賞金首。

しかし十数年前に当時日本を訪れていたナギ・スプリングフィールドによって封印された魔法使い。

まさか関わることになるとは思わなかったな…。

「情報は武器だからな。あんたが俺を観察してたのも知っている」

その後の少女があ夜以降、何かと俺の周囲をうろちよろしてたしな。

「何が目的だ？」

こいつは超鈴音とは違う。超鈴音はある種、世界のためとかいう理由が垣間見れたが、こいつはまさしく自分のためだけに行動している。

超鈴音も突き詰めれば、結局自分のためということになるが、それでも根本的な部分は違う。

「そんなたいしたことではないさ。ただ貴様の正体を知りたくてな……。人間よりも遥かに長いときを生きてきた私でも貴様のような人間は初めて見る」

当然だ。そもそも『この世界』に存在するはずのない力を宿しているのだから。

「…俺を利用するのか？」

「利用とは心外だな。私にかけられた忌ま忌ましきこの呪いを解くのに協力してもらいたいだけだ」

協力…ねえ。

「…無理だな。協力するメリットも、義理も、理由もない。何よりくだらないな」

「くだらないだと…！」

へえ…。さすがは闇の福音。なかなかの威圧感だ。

「ああ、くだらないね。俺にとっては所詮他人事。勝手にくたばればいい」

だいたい『悪』とか自称してるのが馬鹿馬鹿しい。正義とか悪は言葉遊び。自己を正当化する方便にすぎない。

そこをあえて『悪』と名乗り自分を正当化しない。

それは自分は悪いと自覚しているように思えるが、それは違う。

この闇の福音は『悪』という言葉で逃げ道を作っているにすぎない。

600年。この長い時を生きるに当たってかなりの人数を殺したのだろう。賞金首だしな。

しかし、その度にこう思ったのではないだろうか。

『人を殺したのは私が悪だからだ』と。

悪だから人を殺す？だったら『立派な魔法使い』の代名詞とも云える、紅き翼も大悪党になるだろう。

人を殺すのに正義も悪も関係ない。

正義とか悪とかいう言葉は、人を殺した自分の精神を正常に見せ掛けるための仮面だ。

人殺しはどこまでいっても人殺し。そこに正義や悪が介入する余地なんざ微塵もない。

そついった意味では、こいつは脆い。精神は肉体に引っ張られるというが、見た目少女のこいつも、多少はそれがあるのだろう。

特に今回のような我が儘なんか特に。

「こんなくだらないことに俺の貴重な時間が潰されたのか…」

俺をこれ以上ないぐらい睨んでくるが知ったことか。

「じゃあな。せいぜい足掻けよ」か弱い吸血鬼さん『「

やっぱ、魔法使いはくだらない奴ばかりだな。

自分勝手に他人の都合なんかお構い無し。

――…消えてくれないかな？その方が世界のためだと思っけどな。

## Episode 11 (後書き)

感想を頂いた方々。この場を借りてお礼をさせていただきます。

できる限り返信をしようとは思いますが、できないこともありますのでご了承ください。



## E p i s o d e 1 2

突然だが、月日が流れるのは実に早いと思わないか？

かれこれ季節は過ぎ去り、寒さもだんだん厳しくなってきた今日この頃。

街はクリスマススムード一色となっている。もちろん麻帆良学園都市も例外ではなく、路面電車などもそれ用の装飾が施されて実に煌びやかな感じである。

恋人達は聖夜を愛しき人と過ごし、恋人のいない者達はやけになつて同類と寄り合う、もしくは家で引きこもる。天国と地獄が明確な一日。それがクリスマス。

さて、かくいう俺はどうなのか？

そこは想像にお任せすると言いたいところだが、ここは正直に言おう。

俺には予定が入っている。相手は長谷川さんだ。

麻帆良ではクリスマスに合わせて様々な催し物が開かれる。

それに一緒に行かないかというわけだ。

そう。デートである。

とはいっても、ほぼ毎日と言っていいほど一緒に登校しているから、  
別段デートっていうほどでもないのかもしれないな…。

しかし、時期が時期だけにそれなりに気合を入れないといけない。

「実際プレゼントも買ったし、当日までやることはないんだがな」

金に糸目はつけない。…と言いたかったが、たかが中学生がそんな高級品をプレゼントしては相手、つまり長谷川さんも遠慮してしまうだろう。

だから、ちょっと頑張れば手の届くお値段に設定して、各種情報誌等を参考にプレゼントを購入した。

俺自身、特定の人物に対してプレゼントを贈るとするのは初めての経験である。

孤児院の時には、ただみんなでクリスマスを祝うだけで、プレゼントを買う、もしくはもらうなんて余裕は無かった。

そんな俺だから当然女の子に何かをあげるなんてのも当然初めての経験である。

こんなことを言ったら、そもそもこんなに親しくなった女の子も初めてである。

「なんにせよ、気に入ってくれればいいけどな……」

なんとなく空を見上げ、一人呟いてみる。

最近は特に麻帆良側からのアクションもない。闇の福音も静かなものである。麻帆良のデータベースの方も、わずかではあるが、一般人が魔法使いのゴタゴタに巻き込まれたらしいが、その他はさしあたって大きな動きはない。いわゆる『いつもの麻帆良』だ。

「お、雪か……」

見上げた空から はらはらと雪が舞い落ちる。

……ホワイトクリスマスか。悪くないな。

|  
|  
|  
|  
|  
|

「眠れねえ……」

女子寮の自分の部屋にいる私は気が気でない時間を送っている。原因？そんなのは決まってる明日のデートだ。原

布団に潜り込んでからしばらく経つが全く眠れる気配がない。

「……遠足が楽しみで寝られない小学生みたいだな」

そしてなんとなく天井を見上げては彼、つまり神代凜のことを考える。

あの日以降、神代とはよく二人で登校している。自分で言うのもなんだが、麻帆良に来てから、一番仲良くなった人物だ。

最初はとりとめもない世間話しかできなかったが、次第に私も普段思っていることを口にするようになり、最近では愚痴も聞いてもらっている。



彼と、神代といると、こんなんで言うか安心できる？っていうのか、素の自分でいられる。

そして、気がつけば毎朝の登校が楽しみになっているのが現状だ。

「私は……」

ふとあることを考えて、自分の顔が熱くなっているのに気づく。

確かに、神代は誰が見てもイケメンと答える容姿をしている。実際、麻帆良学園女子中等部に密かに？流通している、『麻帆良学園男子中等部 人気ランキング』なるものにも上位にランクしている。

それに私が知る限り、ここ麻帆良において、私と同じくここが『異常』だと理解している人物。

なんだかんだ言ったって、私も立派な？女子中学生。誰かとの恋愛沙汰に興味がないわけではない。だが、周囲の環境がそれを許さなかった。

そんなところに現れた 私と同じ感覚を持つ男子生徒。何かと気にかけてくれる男子生徒。そして気づけば一緒に登校するようになつていた男子生徒。

いつの間にか私の生活の根幹に関わるようになっていく。

… ギャルゲーなら十分すぎる好感度だ。

神代が私のことをどう思っているのかは知らない。だが、私は少な

くとも神代に好意を抱いている。これは間違いない。

なら、この想いに従って行動するのが私らしい。これまでのように感情を隠すことなんて神代には必要ない。

神代には『本当』の私を見てもらいたい。

「よし！覚悟は決まった。あとは寝るだけだ」

このときの私は気づかなかった。

生まれて初めてのデートに何を着ていくのか決めて無く、明日の朝パニックになることを…。

## Episode 12 (後書き)

感想を下さった皆様はこの場をお借りしてお礼を申し上げます。

本当にありがとうございます。



## Episode 13

クリスマス当日。昨夜から降る雪はやむことはなく、一種の幻想的な雰囲気醸し出している。

待ち合わせ場所は世界樹前広場に午前10時。俺は当然待ち合わせ時間の30分前に到着。悠々と長谷川さんを待っている。ふと周りを見渡すと、俺と同じように誰かを待っている人達であふれかえっている。こんな人混みの中で待ち合わせというのも、本当に待ち人を見つけられるのか不安な面もあるが、幸い俺の容姿はこれ以上なく目立つのでその心配はないだろう。

逆にこの容姿で見つけてくれなかったらなんかショックを受けそう  
だ。

周囲の人達がそれぞれ待ち人と一緒にイベント会場へと歩き出す。  
時刻は9時50分。約束の時間の10分前になったところで、俺の  
待ち人も到着だ。

「おはよう」

「ああ、おはよう」

「…待った？」

「それほどじゃないさ。俺もさっき来たところだしね」

ここで待ったと答えるほど俺は馬鹿ではない。セオリー通りの答えだがこんなもんだろうな。

「それより、よく似合っているよ。特に髪を下ろしている姿は初めて見るね」

「あ、ありがと」

正直滅茶苦茶かわいい。服のセンスはもちろん、普段は後ろで一つにまとめている髪を下ろしているので全然雰囲気が違う。普段もそうすればいいと思ったが、それを口に出すことはない。そのあたり

は心得ている。

「それじゃあ行こうか。だいぶ人も集まっているみたいだしね」

世界樹前広場から伸びる大通にはすでに人が多く集まっている。通りに面する店からは威勢のいい声が響いてくる。

俺たち二人も、一緒にその中へと向かう。今日という一日を楽しむために。

- - - - -

ホワイトクリスマスとなった今年の12月25日。この日は私にとつても特別な一日になりそうだ。今までのクリスマスは特に普段と変わることなく、部屋でネットをしたりと、『異常』な『日常』のひとつにすぎなかった。でも今年は違う。隣にいる神代のおかげで『普通』な『日常』となった。

恋人というわけではないが、想い人とのデートを楽しむクリスマス。昨夜はなかなか寝付けなかったが、今朝はその分寝坊するわけもなく、むしろ普段より早く起きられた。

…結論からいうと早起きしてよかったと思う。でないと待ち合わせ時間に遅刻していた。問題が起こったのだ。そう、着ていく服を選ぶという問題が。

私自身コスプレを楽しむのもあってファッションは好きだ。ただ、それを着る機会がなかった。学校ではできる限り他人との接触を避けていたから誰かと遊びに行くこともない。かといって一人で外出するのにバシッと決めるつもりもない。

だからこそ、デートに着ていく服で悩んだ。普段のような服を着ていってはおそらく、神代の横に並んで歩くには見劣りするだろう。となると、思い切って決めていくしかない。でも人前にソレを着ていくことに恥ずかしさも感じる。

そんな感じで悩んでいたらしいのまにか9時になっていた。本当に早起きして良かった。

結果的に悩み抜いた末、私は一番のお気に入りの服を着ていくことに決めた。その結果は上々だ。神代の反応もいい。それに偶然とはいえ神代の服の雰囲気にも合っていた。

「へえ、いろんな店があるなあ」

通りを歩く私と神代。神代は物珍しそうに出店されている店を見ている。店を見ている神代とは対照的に、私は隣の神代が気になってそれどころではない。

うつむきがちな視線を上げてみると私たちの前方を歩く男女が仲良く手をつないでいるのが目に入った。それを見て思わず私は隣を歩く神代の左手を見てしまう。少し手を伸ばせばつなげる距離にあるそれ。とても男性の手とは思えないような綺麗な手。

雪がぱらついていることもあって今日の気温は低い。そんな中、私も神代も手袋などはしていない。必然的に自分の手が冷たくなっているのを感じる。思わず、両手をこすり合わせてしまう。

……その時だった。

「え？」

さっきまで店を見ていた神代がおもむろに私の右手を握った。優しくそれでいて力強く。

「こつしたほうが暖かい。それに人が多くなってきたからはぐれないようにね」

私の顔をのぞき込みながらそういう神代。私がそうして欲しい、そうしたいと思っていたのがばれてしまったのか？

そう思わずにはいらなかったが。そんな些細なことはすぐに吹き飛んでしまった。右手に感じる神代の左手。あれほど冷たかった右手が、今は暖かい。実際の温もりよりも遙かに暖かく感じる。それと同時に全身が熱く感じる。

まったくずるい奴だ。



……これじゃあ、ますます好きになるだろうが。

## Episode 14

「ほら、あのクリスマス限定『麻帆良ケーキ』ってのは？」

「あれってケーキと呼んでいいのか？」

大通りを二人で歩きながら、いろいろなものを見た。神代が私の手を握ってからは、それまでの緊張が嘘のように消え、普段通りの会話ができるようになった。当然のことながら、今も神代と私は手を握ったままだ。

今神代が示したのは、どう見てもジオラマにしか見えないケーキだ。ご丁寧に麻帆良を再現したらしい。明らかに常軌を逸する出来である。

しかし、こんな異常なものを見ても今の私はどうとも思わない。それどころじゃないからな。今は楽しむときだ。それに神代が隣にいと、そんなものを見ても別に動揺もしない。する必要がない。私

はもう『一人』じゃないから。私と同じような人が、すぐ隣にいる。

「次はあの店がいいな」

「ああ、あれか。別にいいよ。時間はまだまだあるからな」

私が希望したのは小物が店の外まであふれている雑貨屋。確か前に立ち読みした雑誌に特集が組まれていた記憶がある。かくいう私もこの通りを通るたびにショーウィンドウを覗き込んでいた。可愛い生活雑貨が多く、単調になりがちな寮の部屋を飾るにはうってつけのシヨップとも言える。当然この店も、クリスマス仕様になっている。

いざ、二人で入店するとそこは人であふれかえっていた。

「多いな……。ここって人気店なのか？」

「ああ。雑誌で特集もされていたし」

「なるほど」

店の中は、外に比べてカップルは少ないものの、それを補ってあまりある女生徒でいっぱいだった。そして私は見つけてしまった。いや、普通に考えればこうなることは分かっていたはずだった。

「これかわええなあ。明日菜はどう思う？」

「いいんじゃない。木乃香の好きなのでいいよ。私はそんなにこだわりがあるわけじゃないしね」

「あかんで。明日菜にも関係あることやないの」

私のクラスメイト、神楽坂明日菜と近衛木乃香の二人だ。寮で二人は同室ということもあるので二人で買い物にでも来ているのだろう。

そうだ。麻帆良のクリスマスといえばこの大通りのショップ。となると私のクラスメイト達もここに来ているかもしれないのだ。現に二人見つけてしまったし。

……いや、まてよ。この二人ならまだマシなほうか。あのアホ毛とパパラッチにこの現場を押さえられるよりは遙かにいい。

「あれ、あの子どつかで……？」

「うん？どないしたん明日菜？」

「いや、あそここの二人組の女の子のほうなんだけど、どつかで見たことがあるような……」

……まずい。普段の私とは全く違う格好をしてるからすぐにはばれてないが、このままだと私だと気づかれてしまうかもしれない。こんなときは店から出るのが一番なんだが、慌てて出て行くと不自然すぎる。

「どうしたの？」

「……ちよつとこつち」

神代の手を引いて商品棚の合間をできる限り自然を装いながら歩いていく。そして若干遠回りしつつだが、無事に店から脱出できた。その間神代は黙って私に着いてきてくれた。

「……もしかしてあの二人組の子？」

店を出て少しして神代がおもむろに尋ねてきた。なんだ、気づいてたのか。

「長谷川さんの知り合いだったの？」

「クラスメイト」

これ以上神代が聞いてくることは無かった。私の気持ちを悟ったのか、それとも聞くべきではないと思ったのか。神代の考えていることはわからないが、これも神代の優しさなのだろう。

…実にありがたい。仮に聞かれたとしても答えられる訳がない。単純に、神楽坂や近衛にこんな場面を見られるのが恥ずかしかっただけだし。

「それじゃ、気分転換に何か食べようか。お昼にもちょうどいい時間だしね」

そついつて。今度は逆に神代が私の手をぐんぐん引っ張っていく。

「…ありがとな」

そう言わずにはいられなかった。神代は何も答えない。聞こえてないのか、それとも聞いてない振りをしているのか。

どちらにせよ、今は感傷に浸るときではない。今は目一杯楽しむときだ。せつかくのクリスマス。どんよりした気持ちで過ごすなんてもつてのほか。さっきのことは忘れて、今は神代と過ごせることに感謝しよう。



「それでどこに行く？」

「意外な穴場ってやつ。ちゃんと調べておいたから」

「へえ…期待してもいいのか？」

神代は笑顔で言い切った。『当然！』と。

そうか、なら思いっきり期待してやろうじゃないか。

## Episode 15

朝から降り続いた雪は未だに降り止まない。しかし、雲切れ目から綺麗な満月が覗いている。

現在、俺と長谷川さんは集合場所であった世界樹前広場から少し離れた所にある、小さな公園に來ている。別に世界樹前広場でも良かったのだが、あそこはまだ人も多い。

落ち着いて話すにはここがちょうどいいのだ。

「今日は楽しかった」

「俺も」

公園に一つだけあるベンチに二人並んで座っている。俺たちはあの後本当にクリスマスでにぎわう大通りを満喫した。事前に調べておいた、お昼を食べた店もなかなか良かった。長谷川さんも気に入ってくれたみたいだ。その後も二人でいろんな店を見て回ったり、簡単なゲームにも参加したりした。

あの雑貨屋での雰囲気はなりを潜め、長谷川さんも終始笑顔であった。

うん。初めてのデートとしては合格点といったところかな。

「実はさ、俺、こんな風にクリスマスを過ごすのは初めてでさ。だから今日は長谷川さんに楽しんでもらえなかったらどうしようか不安だったけど、楽しんでもらえたなら良かった」

「私も…そうだ。今まではクリスマスでも普通に部屋にいたし、そもそもこんな格好で外にでるのも初めてだよ」

うん。照れながら話す長谷川さんは実に可愛いと思う。これがいわゆるツンデレという奴なのか？普段の男っぽい口調が微妙に崩れているところがまた…。

「それにしても、麻帆良の人間ってすごいね。たかがクリスマスであれだけ騒げるのだから」

「まあな。お祭り好きとしては騒がずにはいられないんだろうな」

こういったとりとめもない会話もいいが、そろそろ時間も遅くなってきた。俺はマンションだからいいが、長谷川さんには門限がある。それに遅れさせてはダメだ。

男、神代凜。これより初めてのプレゼントを渡します！

俺はコートの内ポケットにある長方形の箱を取り出す。当然可愛らしくラッピングされている。俺の手元を見て長谷川さんは驚いたような表情をしている。

「メリークリスマス」

一言告げて長谷川さんに渡す。壊れ物を扱うかのように受け取る長谷川さんを見て苦笑してしまう。そこまでするほどの品物ではない。

「あ、開けてもいいか？」

「別にいいけど、あまり期待しないでくれよ」

慎重に包装紙を外していく長谷川さん。そしてその中身が露わになる。

「…綺麗」

俺がプレゼントしたのはネックレスだ。特徴的なのは淡く紫に煌めく水晶。

「…これって、アメジスト？」

「長谷川さんって2月2日が誕生日でしょ？だからアメジストを選

んでみたのだけど…」

2月の誕生石はアメジストだ。石言葉には『誠実』や『心の平和』などがある。

「…ありがとう」

今絞り出すような声と共に 今日一番の笑顔を見せてくれる長谷川さん。

「どづいたしまして」

どうやらプレゼントは上手くいったようだ。良かった…。

――――

今日は本当に私にとって特別な一日であると心から言えるだろう。日中のデートも楽しかった。これまで部屋に籠もってばかりいた自分が馬鹿に思えるほど。

それ以上に、まさかプレゼントを神代からもらえるとは思わなかった。しかも私の誕生石のアメジストのネックレス。



公園の街灯の光を反射して、淡く輝く紫色のそれは本当に綺麗だ。

「ほんと、神代って不思議な奴だよな」

「ははっ、それは褒めているのか？」

どことなく中世的な顔立ちをしていて、上手くメイクすれば美少女にも見えるのに、すごく男らしい部分もある。

「でもさ、そんな不思議なやつだから、一緒にいると落ち着けるんだろっな」

あの日、神代が私を助けてくれなかったら今日という日は存在しなかった。私と神代がクリスマスにデートして、それでこんな綺麗なネックレスをプレゼントしてくれた。

「私はこれまで周りが普通に思っていることが異常にしか思えなかった。そしてそれを周りに言ってみると、私が変わなだ、異常だと言われた」

だからこそ私は他者とのコミュニケーションをできる限り避けていた。一種の対人恐怖症だった。

だからこそ私は他人の顔が見えることのないネットの世界へと、自分の世界を広げていったのだ。

「最初はそれでも友達を作ろうとした。でも、私と同じように、麻帆良がおかしいという人は一人もいなかった」

そして、気づけば私はひとりになっていた。

「神代が私と同じように、麻帆良が異常だと感じていると知ったときには神代も私と同じような境遇にあったかもしれないと思ったけど、それ以上に嬉しかった」

私はひとりじゃないって思えた。だからこそ、ここまで心を開けたのだと思う。

「私の愚痴も嫌な顔ひとつせず聞いてくれるし、今日もそうだったけど、私がしてほしいと思ったことをしてくれる」

普通に考えれば、神代の容姿は、昔の私なら異常だと言いつついた。純日本人のくせに輝く銀髪。瞳はどことなく不思議な色をしている。けっして黒ではない。アルビノとも取れる。でも、私がそれを言わず、逆に積極的に関わりを持つようとしているのはほかでもない。

「私はそんな神代が好きだ。友愛なんかじゃない。一人の女として、神代凜という男が好きだ」

真剣に私の話を聞いてくれていた神代の表情が変わる。おそらく神代から見たら私の顔は真っ赤な茹で蛸のようになっていただろう。

でも、今日の本当の目的は私の思いを神代に伝えること。思い切つて言つてはみたが、滅茶苦茶恥ずかしい。

「だから、私のことをどう思つてくれるのか教えて欲しい……」

神代の言葉が怖い……。告白なんか初めての経験だ。

「俺は……」

神代の言葉を聞いた瞬間、体がビクついた。不安や期待。様々な感情が私の心をかき乱す。

「俺は、こんなに親しくなったのは長谷川さんが初めてだ。そして、長谷川さんに友達に向ける以上の好意を抱いているのも事実」

心臓が跳ね上がる。だってそうだろ。今の神代の言葉は私に恋愛感情を持っているということだ。

「でも、少し時間が欲しい。長谷川さんの思いは正直嬉しい。でも、少しだけ時間が欲しい」

…時間が欲しい？

「言い方が悪かった。ちょっと俺の中で整理する時間がほしい」

当然といえば当然だ。いきなり告白したのは私。私が逆の立場でも即答はできない。

「分かった。じゃあそのときを待ってるから」

神代のことだ。こう言っておきながらも早く答えてくれるだろう。

「それじゃ今日は帰るよ。ありがとう。これ大切にするから」

「ああ。ありがとう」

こうして、私は寮へ足を進める。

神代の答えは聞けなかったが、私は満足している。気持ちを伝えたらなんかすっきりした。それに、こんなにも素敵なプレゼントももらった。

寮へと向かう足取りも軽い。

私は、意気揚々と帰路についた。



私のことを空から見ている人物がいることも気づかずに……

## Episode 15 (後書き)

携帯を打つ指が止まらない

故に連続投稿でした。

## Episode 16

「俺が好き…か」

正直、驚いた。しかし同時に不安もある。長谷川さんは俺にその気持ち打ち明けてくれた。だが俺はどうだ？

確かに長谷川さんの気持ちに答えたいという気持ちはある。実際俺は長谷川さんに惹かれているのだろう。

だが、俺は『普通』じゃない。誰よりも普通を求める長谷川さんの側に『異常』な俺がいてもいいのか。そもそも俺は隠し事だらけだ。

そして、何より俺の手は血塗れになっている。

長谷川さんの気持ちを否定する理由は存在しない。後は俺自身が踏み出すかどうか。

内心で葛藤を繰り返しながら、俺は家へと到着した。そして気づく、玄關のドアに茶封筒が挟まれている。

「差出人は不明。宛先も不明……」

見るからに怪しいそれ。確かめるように封筒の上から中身を確認するが、何か堅いものが入っているのがわかる。

誰が何の目的でこんなものを送ってきたのかは知らないが中身を確認しないわけにはいかない。封を破り、中身を出す。

「……」

出てきた中身は淡く紫に輝くアメジストをあしらったネックレス。  
見間違うはずがない俺が長谷川さんにプレゼントしたものだ。

そして小さな紙片に『世界樹前広場 Eva』と書いてあった。

瞬間、ざわついていた感情が一気にクリアになる。そして思考が加速すると同時に俺は駆けだした。

「…迂闊だった。少し考えれば分かる事じゃないか!!」

闇の福音とやらを甘く見すぎた。その結果がこれだ。所詮封印されている人物としか認識していなかった。奴の600年という経験を考慮しなかった。奴にすれば一時的に呪いを弱める方法を知っている。仮にそれをしたとしても、俺にとっては取るに足らない人物という評価が、この状況を招いた。

「何が誇りある悪だ。ただの小悪党だ」

ここ最近に起こっていた一般生徒が巻き込まれた事件というのは十中八九エヴァンジェリンが絡んでいる。おそらくその血を吸い、少しずつ魔力を得ていったのだろう。

それに犯行の痕跡を消すぐらい造作もないはず。奴の側にいたあの

ロボット。あいつが麻帆良のデータベースを改ざんしたに違いない。内部犯行と思われるなどと記録されたデータを『偶然巻き込まれた』とでも改ざんしたのだろう。

俺はまんまとそれに引っかったわけだ。しかも今日は満月。吸血鬼の力が一番高まるときだ。

奴の目的が何かは分からないが、俺にその目的がある以上、長谷川さんに危害を加えるつもりはないだろう。あくまで俺をおびき寄せ、餌にすぎないはず。だが、こうやって、巻き込んでしまった以上、話すしか無いだろう。記憶を消すなんてもってのほかだ。

間違いなく、俺はエヴァンジェリンと交戦するだろう。話し合いで済ませるつもりは全くない。殺すつもりはないが、相応の代償は必ず与える。

しかし、そうなるとまた別の問題が生じる。

学園側の干渉である。

俺の場合は魔力も気も使用せず、剣のみで戦えるがエヴァンジェリオンはそうではない。しかも、封印対象が戦闘を行っているとすれば、学園の魔法使いは飛んで駆けつけるはず。

俺はその存在を知られているからまだいいが、長谷川さんはそうはいかない。学園側は彼女の記憶を消そうとするのは言うまでもない。

絶対にそれはやらせない。彼女の記憶は彼女のもの。それを勝手な事情で、魔法の秘匿とかいうくだらない理由で奪うのは許さない。



「潰す……!!」

何をどうするにせよ、まずはエヴァンジェリンからだ…

## Episode 16 (後書き)

今回はこれまで張っておいた伏線回収です。

なお、この事件が終われば原作に突入します。

薬味もやってきます。

## Episode 17

「神代!!」

世界樹前広場の最奥に長谷川さんが、そしてその横にエヴァンジェリンとロボットがいた。長谷川さんは拘束魔法をかけられているようだ、別段外傷は見あたらない。

「よく来たな…」

相変わらず尊大な態度でもってエヴァンジェリンが話しかけてくるが相手をする必要は皆無。

「大丈夫か？」

「「「「!!」」」」

刹那。俺は長谷川さんの目の前へと移動。地面に描かれている魔法陣に軽く手を触れ破壊。そして長谷川さんを抱えて小悪党から距離を取る。

「……ここで大人しくしていてくれるか？」

努めて冷静に言葉を発するが自分でも言葉の端に怒りが感じられる。

そして、持ってきたアメジストのネックレスに結界魔法を掛け長谷川さんに手渡す。これで戦闘の余波に巻き込まれることはないだろう。

「神代！どうなってんだよこれは！？」

「混乱するのもわかる。でもこれから起こることは紛れもない『現実』だ。俺に分かることなら後でいくらでも答える」

俺は決めた。長谷川さんには全てを話す。だが、今はのんびりと会話をするときではない。俺に説明を求める長谷川さんを制し、俺は再び小悪党と対峙する。

「今の動きはなんだ？」

答える義理もない。

「私が構築した拘束魔法陣を一瞬で破壊。やはり貴様はただの魔法使いではないな」

当然だ。俺は『化け物』さ。

「だが所詮は人間。私に敵うはずがない。どうだ？素直に私に協力するならばこの場は見逃してやろう。その女の記憶もちゃんと元に戻してやる」

…それは俺の台詞だ。この場における強者は俺。貴様は弱者だ。

「…勘違いするな。見逃してもらっ、許しを請うのはお前だよ。誇りもなにもないただのクズ」

「…何だと？」

もはや問答は無用。俺の答えはこいつを潰すことのみ。

「殺しはしない。仕置きをするだけだ」

「……いい度胸だ！この闇の福音に楯突いて無事でいられると思うな  
……」

その言葉をきっかけにロボットと、エヴァンジェリンの背後から１メートルを越える刃物を両手に持った人形が飛び出してくる。

「キリングドール殺戮人形か……」

「キャハハハハッ」

エヴァンジェリンの全盛期から行動を共にしている人形。エヴァンジェリンの二つ名の『人形使い』はこいつからきているのだろう。

確かにこれだけサイズが小さい上に、この速度。熟練の戦士でも手こずるだろう。地を這うように俺に接近し、直前で飛び上がり、大上段からの唐竹割り。

「……」

エヴァンジェリンが糸で操っているならまだしも、こいつは自動人形。人間と同じく空では方向転換などできない。つまり、

「格好の餌食だ」

正宗で一刺し。この人形が持つ剣と正宗ではリーチの差がありすぎる。向こうの間合いに入る前に、俺の間合いに奴が勝手に入ってくれる。ましてや、正宗は抜く動作を必要としないから、こういった不意打ちも可能。

直前で身を擦ってかわそうとしたその反応はすごいが、いくら身を擦ろうとも正中線、体の体幹をずらすことはできない。

突き刺した正宗を抜き、刹那の四連撃でもって四肢を切断。最後にこいつが持っている剣で地面にその胴体を縫いつける。

「チツ…！」

うって変わって肉弾戦を仕掛けてきたロボットも同様、向こうの間合いに入る前に、四肢を切断。ついでに上半身と下半身を真っ二つに分けてやる。

「『魔法の射手・闇の』…!!」

「簡単に撃たせると思ったか？」

俺が従者二人を潰した直後、魔法の射手を放とうとしていたエヴァンジェリンに接敵。俺の移動は単純な身体能力。魔力も気も使わな  
いがゆえに、察知がづらいという利点がある。

「『断罪の剣』！」  
エクスキューショナー・ソード

俺の剣戟を右手に集めた魔力の剣でもって防ぐエヴァンジェリン。  
咄嗟の判断。そしてそれを即座に実行できる魔力運用と身体能力。

この辺りはさすがというべきか？

「しかし、あんたは剣の素人。素人に防げるほど俺の剣は甘くない」

……『一閃』。



虚実を交えた剣戟の最中、超高速でエヴァンジェリンをすり抜け浴びせる十三の斬撃。その全てがエヴァンジェリンの体へと吸い込まれ血しぶきを上げる。

「私に傷をつけるか…」

この程度でどうにかなると思っではないが、目の前でそれなりに深かった傷が再生されると、改めて魔法って奴のすごさを実感する。

「だが、この程度の傷。私にとっては致命傷にもならん。真祖の吸血鬼を舐めるなよ？」

「不死殺しでもないが無駄だって言いたいのか？」

「フツ…。その通りだ」

分かってはいたが厄介だな。おそらく魔力が尽きない限り、再生し続けるのだろう。封印状態で本来の魔力量でないとはいえ、それを尽きるまで攻撃し続けるのは正直、面倒だ。

となると、不死殺しの武器で攻撃するのが手っ取り早いのだが、生憎正宗は妖刀ではあるが不死殺しではない。

「……仕方ない」

「なんだ降参か？だが、我が従者をああしてくれた以上、その代償は払ってもらうぞ」

手の内はあまり晒したくはないが、現状ではこれがベストだな。

……『心ない天使』

## Episode 18

「き、貴様…！何を…！！」

「やはり、『これ』は使えるな」

神代から碧色の靄のようなものが立ち上った直後、エヴァンジェリオンが倒れた。その顔色はひどく悪い。医療知識のない私でもあれは瀕死、もしくはそれに近い状態だと理解できる。

「これはプレゼントだ」

倒れたエヴァンジェリンに対して、神代がその馬鹿でかい日本刀をお腹に突き立てる。端から見ると墓標に見えなくはない。残酷ともいえる光景だが、何故か嫌悪感を感じない。全く感じないというわけではないが、それ以上に私の中でしつくりとくる部分がある。

正直、今でも目の前の現実が夢ではないかと疑ってしまふ。飛び交

う常識を越えた現象の数々。飛びかかる刃物を持った人形とクラスメイトのロボット。

そしてそれを躊躇無く、日本刀で切り捨てた神代。飛びかかった二人？とは対照的に、その場から動かなかったエヴァンジェリンも、瞬間移動でもしたのかと思うほどの動きをした神代に、同様に斬られた。

だが、驚くことに神代がつけた傷は、みるみるうちに治っていった。そしてエヴァンジェリンの口からは『吸血鬼』という単語が聞こえた。

…吸血鬼っていうのは確か、ブラム・ストーカーの『ドラキュラ』、シェリダン・レ・ファニユの『カーミラ』とかに登場する架空の存在のほず。生と死を超えた者、または生と死の狭間に存在する者、不死者の王と呼ばれ、凶悪な犯罪者の通称としても使われる。バンパイア、ヴァンピールなども表現される。

「空想の世界の存在じゃないのかよ…」

一般に吸血鬼は、一度死んだ人間がなんらかの理由により不死者として蘇ったものと考えられているらしい。現代の吸血鬼・バンパイ

ヤのイメージは、ヨーロッパの伝承に起源をもつものが強い。吸血鬼の伝承は世界各地で見られ、東ヨーロッパのバンパイアに加え、アラビアのグール、中国のキョンシー等がある。

にわかには信じられないが、あれだけの光景を目の前でまざまざと見せつけられては信じざるを得ない。なにより、神代が『これから起こることは全て現実』と言っていた。私が知る『空想』が今目の前で現実となっている。

「魔法か…？」

目の前で起こった現象。これまで私が麻帆良で過ごしてきた中での『異常』な現象。その全てを説明するのにこれほどぴったりの言葉はない…はず。私が『異常』と感じているのに、周囲の人間がそれを『普通』と認識していたのも魔法が原因かもしれない。吸血鬼が存在するくらいだ。人の意識を誘導する魔法くらい普通にあるだろう。麻帆良七不思議にも挙げられる『魔法少女』『魔法親父』とかも、火のない所に煙は立たないというから実際にいるのだろう。あの馬鹿でかい世界樹もそれに関係するのか？……あの学園長の常軌を逸した後頭部も？

「…神代に聞けば全部はつきりするか」

私がいくら考えようともそれは想像・予想にすぎない。神代が全て話してくれると言うのだ。だったら神代に聞けばいい。

神代がこちらに歩いて来ているのを見るとどうやら終わったようだ。広場にはバラバラになった人形とロボット。日本刀で杭打ちをされたエヴァンジェリン。『異常』な光景だ。法治国家日本、というより世界のどこを探してもこんな光景は目にすることは無いだろう。

しかし何故だろう？

これだけのことをした神代に対する感情は以前のそれと変わらない。神代が私を守るために戦ってくれたからか？それとも私が神代に惚れているからか？

…神代がいつも儚げな雰囲気纏っている理由が分かったからか？

「立てるか？」

「うん」

「なら場所を変えよう。…そうだな、俺の部屋に行こう。そこで全てを話すよ」

「…アレは放っておいていいのか？」

「別に死にはしない。それに迎えも来るだろうしね」

神代が私の手を取る。そして広場から立ち去ろうとしたが…

「動くでない！！」

学園長とその他数人が広場にやってきた。ちらほらと知った顔も見える。どういう事かと神代を見ると軽く舌打ちをしていた。一方、学園長とその他大勢は広場の状態を見て目を見開いている。…当然の反応だよな。

「長谷川さん。そのネックレスをちゃんと持ってた」

そう言われて、慌ててネックレスを両手でしっかりと握りしめる。  
もしかして、このネックレスに何かあるのか？

「これはお主の仕業か？」

「そうですね、なにか？」

悪びれた様子もなく平然と神代は答える。逆に学園長と一緒に来た  
何人かはその答えに憤慨している様子だ。

「エヴァンジェリンが彼女を誘拐したので、俺は彼女を取り戻した  
だけ」

「それならこの惨状はどう説明する？」

「正当防衛。…もとい仕置きだ。やり過ぎとでも言うのか？別に普通  
通だろ。第一、一般人を襲うような奴に、闇の大魔法使いとも呼ば  
れるエヴァンジェリンに対する仕置きとしては優しいものじゃない  
か？ああ、そうそう。刀には触れない方がいい。俺以外にはさわれ  
ないから。ちなみに後三時間は消えないぞ」



あれで優しいのか。十分すぎるような気がするが。…というかエヴァンジェリンはあのまま三時間を過ごすのか？

「事情とか聞きたいならエヴァンジェリン、もしくはそのロボットの記憶を覗け。俺から話すことはない。ましてや目撃者たる長谷川さんに聞く必要もない」

「それはこちらが決める」

「関係ないね。俺のことは俺が決める。長谷川さんについてはあんたに任したらそれこそ都合のいい駒にされるか今夜の記憶を消すかの二択だ」

記憶を消す！？そんなことをされるのか私は！？

「冗談じゃない！私の記憶は私のものだ。勝手に消されてたまるか！」

「…本人がこういつている以上記憶を消すのは無理だな。ましてや長谷川さんは学園の認識障害が効いていない。これはあんたらの責任だ。そのおかげで彼女の心は脆く、壊れやすくなっていた。これ以上の負担をかけることは俺が許さない」

神代が私の右肩に手を回して一際強く抱き寄せる。…思わず顔が熱くなる。

「それに気づいてないとも思ったか？長谷川さんがいる2・Aは意図的に関係者、もしくはその素養のある者を集めてるだろ。まるで誰かの為に準備しているようだ。……冬にくる『英雄の息子』のためかな？つまり彼のパートナーとなりうる人材を集めたというわけだ」

「……！」

英雄の息子？今の時代に英雄なんていたか？神代が何を言っているのか私には分からないが、学園長はピンときているようだ。

「長谷川さんはどうする？このまま学園長の言いように使われる人生なんてまっぴらでしょ？」

…未だに把握しきれない部分もあるが、おそらく神代と学園長は敵対、もしくはそれに近い部分があるのだろう。心情的なものかもしれないが、私の今後に関わることを今、神代は聞いているのだろう。

「…私の人生は私が決める。誰かのいいように使われるのはごめんだ。それに神代から話を聞いてないしな。それに私は神代を信じる。得体の知れない学園長とその部下の世話になるのは嫌だな」

誰かの手のひらで動くのは嫌だ。しかも、これまで私が異常と感じ、周囲の人が普通と感じていたのは学園長の仕業の可能性が高い。だとすると学園長には好意どころか嫌悪感しかない。トップの学園長がそうなら、現在この場にいる部下らしき人達も似たようなもの。

「なら長谷川さんは俺が守る。今回のような事は二度と起きないようにする」

「神代…」

「…聞いていたな？長谷川さんは俺が守る。学園側が彼女に手を出せば、そこに転がる連中と同じ道をたどってもらう。ちなみにその闇の福音は、これ以降、俺もしくは長谷川さんに害意を抱いた瞬間、そのような状態、瀕死状態となる」

「お主…！」

「そいつがどうなろうと知ったことではない。その状態では真祖の吸血鬼の不死性もなくなっているから簡単に殺せるぞ？まあ害意を抱かなければ普通に過ごせるから安心しろ。あんたの思惑通りにそいつに彼の師匠になってほしいのならちゃんと言い含めておくんだ

な  
」

……この日は魔法という存在を知った。そして私が、真の意味で自分の人生を歩み始めたのはこの日なのは言うまでもない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8526t/>

---

魔法先生ネギま！ ～片翼の天使の力を得た男～

2011年9月5日19時52分発行